Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-02

日本近代文学における五感表現の総合的研究

真銅，正宏

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2016-09-21
(Date of Publication)
2018-09-21
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙第3314号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003314

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論文題目　（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

日本近代文学における五感表現の総合的研究

氏　名：　真銅正宏

本論文は、言語記号を用いて作られた小説などの文学作品について、読者の読書行為における再現の仕組みを、特に五感の関与の側面から論じたものである。

考察対象は、日本近現代文学の作品群から広く選んだものである。

小説に代表される文学は、文字芸術であり、そこには、予め与えられた物質性はなく、したがって、本来、映像もなければ音もなく、匂いも触感も味もない。それらを感じ取るシステムとは、文字という記号に触発された、読者のイメージ化を指すもので、あくまで読者の想像の中での出来事である。基本的には、すべて文字という記号の働きに還元される。その意味で、読書行為とは、極めて非感覚的な行為のはずである。

ただ、文字という記号が招来するイメージは、読者がこれまで生きてきた過程で得た知識からもたらされるので、ここには五感が深く関わっている。そこに、ある種の感覚と、その対象物の物質性が関与する可能性がある。

文字で書かれた料理が現実には食べられないように、たとえそれが、いわば幻覚としての記号上のイメージであったり、あるいは知覚の誤作動としての錯覚の産物であったりしても、我々が読書行為の中で、映像を呼び起こし、時には音を聞き、匂いに反応し、味の想像によって空腹感を増し、さらには、得体の知れない手触りに怖気をもつような体験は確かにある。

このような記号の現実化とも呼ぶべき想像力の活躍は、読書行為を現実的に成立させ、さらに、同じ文字を追いながらも、読後感など、読書行為に個人差を生じさせる要因ともなる。文字記号は、読者の身体と関わることにより、いわば機械的な信号から、人間的な、個々の人間のもう一つの生きられる世界を指し示す案内者へと転換する。

本論文においては、五感のうちでも、味覚、嗅覚、触覚を中心とした。視覚もまた五感の一つであるが、二〇世紀に一段と進んだ、我々が所属している社会全体の視覚重視の傾向は、これを特権化し、小説などの文学作品の中においては、他の感覚要素を排除するほどにもなったものと考えられる。この状況を承けて、従来の文学研究もまた、視覚表現を対象とするものに偏っている。視覚は、五感という感覚要素ではなく、むしろ、認識と深く結びついた、理知的判断要素に近づいている。そのために、ここでは敢えて対象に据えないことにした。

また、聴覚表現については、検討すべき点が多いが、これについては、他の五感要素と共に用いられることも多いので、本論文においては、共感覚の文脈の中で扱うこととした。

内容をより具体的に提示すれば、味覚表現については、食べ物の味を、言葉でどのように表現するの

かという問題から始め、言葉で味を言い表すことが、食通なる存在と通じることを指摘した。また、美味いという概念が、文化的に形成されたものであることを改めて検討した。また、明治・大正・昭和の各時代の表現を分析することにより、食べ物をめぐる表現の時代性についても考察を加えた。

嗅覚表現については、普段意識しない、あるいは敢えて書かれない匂いの表現の意味から始め、好い香りとは何かについて考察し、嫉妬と結びつけられた匂いや、記憶と結びついた匂いなどの表現を通覧して考察を加えた。さらに、臭いにおいの表現の特徴を見て取り、臭いながらも美味い食品について書かれた表現から、匂いの複雑な感覚性について考察を及ぼした。言葉によって、どのように読者に匂いが届けられるのかについて、さまざまな作品の表現を比較検討した。

最後に、触覚表現については、身体の接触と感情の揺れ動きの関係についての考察から始め、触覚と芸術の関係を検討し、また盲目と触覚が深く関係づけられて表現されてきたことを改めて論じた。また、不感症を、逆説的な触感の表現として扱った。さらに、フェティシズムにおける触感について考察した。また、人間ばかりにとどまらず、焼き物などの物質的触感や、兎や蛇という動物の触感についての表現について考察を加えた。

ところで、このような、読書という行為に関わる五感の働き、その魅力の分析は、これまで十分に積み重ねられてきたとは言い難い。

先にも述べたとおり、言語表現は、記号の体系の代表的存在であり、したがって、文字言語による作品群は、記号学の基本的な研究素材を提供してきた。小説はとりわけその代表的存在である。しかしこれまでは、その記号の構造に、主に脚光が浴びせられ、記号表現と結びつけられる記号内容は、概念として扱われるにとどまる場合が多かったものと考えられる。これは、作中の文字表現は、五感を介さず、再現せずとも読める、という立場によって、仕組みが解明されてきたと言い換えることができる。しかしその一方で、読者が、時に、記号の概念的な理解を留保し、いったん自らの実体験に差し戻し、読書行為とはやや離れることを承知で、五感による再現を目指すことも事実であろう。それをもやはり読書行為に含めるならば、五感による読書行為は、今もまだ生き続けているということもできる。今、ここで、もう一度問い直したいのは、このような要素に関わる読書行為の魅力の仕組みについてなのである。

ましてや、文学作品中の嗅覚や触覚の諸要素の効果をめぐる記号学については、全く手つかずの分野といってよい。小説に描かれた味覚の要素のみが、かろうじて注目されてはいるものの、必ずしも正面切っての研究という目的の下に行われたものとは云いがたい。

視覚と聴覚とは、「知的かつ美的な感覚」とされる。二〇世紀が、視覚と聴覚に訴える文化を重視し、またメディアとしても、ラジオや映画、後のテレヴィジョンなどの技術の画期的な進化により、革命的

発展を遂げたことは言うまでもない。視覚や聴覚は、放送などを介し、距離をおいても相手に伝わる。これは、大量の情報発信、いわゆるマス・メディアとしての機能をも可能とする。それらは、人類の知的な発展に多大なる貢献をした。それらに比べ、嗅覚と触覚、および味覚とは、感覚が伝わるためには、接触することが前提となっているので、対象との距離は限定される。すなわち、原始的な個と個とのつながりが残存する感覚なのである。したがって、その表現は、私的なものへと傾きがちになる。

小説などを近代的なメディアの一つと捉えるならば、このメディアによって伝えられた嗅覚や触覚、および味覚は、読者にとって、接触的に、個的に感じ取るようなものではないために、極めて再現されにくい要素であることを露呈してしまう。二〇世紀以降の、鑑賞に距離を介在させる芸術の進展においては、この傾向は、一気に、加速的に進んだものと想定される。

しかしながら、もし読者が、その読書行為の中で、十分に作中世界を再現できていないのであるならば、テクストの豊かさを十分に享受できているとは云えないのではないか。特にそれは、五感の再現について典型的ではないか。我々の読書は、何れ完璧なものなどないにせよ、楽しめるはずの材料は用意されているのに、うまくそれを受け止めることができず、勿体ないものになってしまっているのではないか。このような疑問から、この研究は始まっている。この疑問を解くべく、本研究においては、五感のうちでもより問題が明確に窺える、味覚、嗅覚、触覚が描かれた作品について、総合的に分析した。これが第一点目の論点である。

次に、文学研究をやや超えた問題がある。

読者の想像力による再現が豊かに行われるためには、読者の中に、触感や味覚、嗅覚の実感的感覚が予め存在していることが必要である。

ところで、我々は、現実世界においても、何かを匂い、味わい、触る楽しみを、失いつつあるのではないか。我々は、意識して何かを積極的に触っているであろうか。日々の食事の中で、しっかりとその味を味わっているであろうか。庭の花の香りを、嗅ぎ分けているだろうか。

我々には、想像力の発揮の前に、先ず、現実世界における触感の確認が求められている。現実世界の感覚自体が退化しつつある可能性は否定できないのではないか。視覚文化の画期的な進展のために、世の中の出来事は、見ることだけで事足り、理解できるという誤解を生んだのではないか。あらゆるものを理解するに際し、手で触り、匂いを嗅ぎ、時に口に入れて味わってみる、という作業は、現実世界においても、少なくなっているのではないか。目で見るだけで、本当にその対象を理解することができるのであろうか。触感は、対象との距離を縮める、かつての常套の手段であったはずが、現在では十分に機能する役割を与えられていないのではないか。

このような、現実界において置かれている触感や味覚、嗅覚などの危機感についても、間接的ながら考察を及ぼした。本研究の第二の論点である。

三点目として、小説の書かれ方自体に関する論点がある。かつての小説家たちにとって、感覚を描くことが、小説作法上の一つの効果的手段として認識されていたことが想像されるに至った。

これらの論点を通し、読書行為が、極めて曖昧で、客観的に分析しがたい性格を持つことの理由として、記号による再現に、その原因が存することが改めて明らかになった。読書をめぐる三要素、すなわち、作者、テクスト、読者のうち、読者のみが不特定多数であり、措定しがたいことは、これまでもしばしば指摘されてきたことであるが、ただ不特定多数であることだけが、文学の伝達において曖昧性を示すのではなく、その再現の仕組みにおいて、記号性からこぼれ落ちる、読者の個人の私的な顔が関わるためであるという結論が得られた。これは、ごく当然の結論ではあるが、文学を科学的に分析することを目指す場合に、論の中にあらかじめ組み込むべき曖昧性の条件項として極めて重要であろう。

論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	真銅 正宏
論　文　題　目	日本近代文学における五感表現の総合的研究

1　審査委員

区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	田中 康二
副　査	教授	福長 進
副　査	教授	鈴木 義和
副　査	教授	宮下規久朗
副　査	准教授	梶尾 文武

2　論文審査の結果の要旨・・・・・別紙１のとおり

3　試験の結果の要旨・・・・・・・別紙２のとおり

4　学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果，並びに学力の確認の結果，論文提出者は博士（文学）の学位を得る資格があることを認める。

神戸大学大学院人文学研究科

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	真銅 正宏
論 文 題 目	日本近代文学における五感表現の総合的研究

要　　旨

本論文は、言語記号を用いて創られた小説等の文学作品について、読者の読書行為における再現の仕組みを、特に五感の関与の側面から論じたものである。そもそも小説に代表される文学作品は、文字芸術であり、そこにはあらかじめ与えられた物質性はなく、したがって本来は映像もなければ音もなく、匂いも触感も味もない。それらを感じ取るシステムは、文字という記号に触発された、読者のイメージ化であって、あくまでも読者の想像の中での出来事である。そういった意味で、読書行為とは、きわめて非感覚的な行為であるはずである。ところが、現実世界の中でしばしば起きる幻覚や錯覚と同様に、読書という行為は見えないはずの映像を呼び起こし、きこえるはずのない音を聞き、匂いに反応し、味の想像によって空腹感をもよおし、得体の知れない感触に寒気を感じることが実際にある。このような文字記号が引き起こす想像力の働きは、同じ読書をしながらも千差万別の読後感を生じさせる機縁となる。

以上のような問題意識に基づいて、本論文は、近現代に公刊された日本の小説をめぐって、五感（視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚）表現という観点から文学作品の本質に切り込もうとするもので、とりわけこれまで本格的に研究対象とされることが少なかった味覚・嗅覚・触覚について、時代縦断的に、そしてジャンル横断的に分析するものである。なお、味覚・嗅覚・触覚に共通するのは、「低次の感覚」（カント）であることと、原則として対象物との接触ということが条件となることである。視覚と聴覚が通信や放送などを通して、距離を置いても伝わる感覚であることと対照的である。以下、各部ごとの叙述の要旨と論点を簡潔に述べることとする。

総論「五感表現の研究が切り開くもの」は、本論文全体の目論見と各部間の関連性を指摘する。すなわち、単なる記号にすぎない文字が、読書という行為を通して、読者の中に五感を再現させるメカニズムを解明することにより、近年研究が進んでいる読者論を踏まえつつ、より繊細で丁寧な分析によって、新たな地平を切り開く可能性を示す。総論に続き、三部構成の本論を置いて、本格的な小説表現の分析に入る。扱う小説は多岐多様にわたり、谷崎潤一郎・永井荷風・江戸川乱歩から、川上弘美・金原ひとみまで、近代文学百年における小説の言語表現の歴史を辿る。

第Ｉ部「味覚表現」は、本来は自身の舌で感じられるはずの「味」が読書体験によって読者の中に再現される仕組みを考察する。もちろん、味は味覚だけでなく、嗅覚や視覚あるいは触覚をも動員して総合的に味わわれるものであるという前提から、読書における想像力の機能についての分析に踏み込む。また、味覚表現が出る文学作品の多くが「食通（グルメ）小説」であるにもかかわらず、それを読む者は必ずしも食通ではないという、知識や体験の力関係の不均衡が生み出す効果にも言及する。さらに、料理人と食通との関係を文学作品の作者と読者との関係になぞらえる観点から、小説の味覚表現を読み解く方向性を提示する。なお、「うまい」という用語がさまざまな文化現象の出現とともに形成された、きわめて文化的な概念であることを立証する。さらにすすんで、明治・大正・昭和の各時代における、五感の文学表現を分析することにより、食べ物をめぐる表現の出現する頻度についても検討する。

主査記載 氏名・印	田中康二

第Ⅱ部「嗅覚表現」は、人の好悪感情に直結する「匂い」が近代小説の中でいかに描かれ、そしていかに全体の主題と関係しているのかについて論じる。まず嗅覚が五感の中で最も当人の心理状態に影響を受ける感覚であることを確認した上で、嗅覚表現の有無または濃淡によって、登場人物同士の関係性を測定する手法を提言する。また、嗅覚の譬喩性に論及し、本来であれば「うまく言えない」はずの感覚を、言葉にすることによってうまく伝達できてしまう、言語表現の有するからくりを説き明かす。さらに、よい匂いとは何かという問題を提起し、記憶に結びついた匂いや嫉妬に結びつけられた匂いに関して、その表現が用いられる場面との関係から発生する意味を分析する。なお、くさい匂いの表現の特徴を押さえつつ、くさいながらもうまい食べ物について書かれた言説から、匂いが持つ複雑な感覚性について考察する。

第Ⅲ部「触覚表現」は、読書行為によって再現することがもっとも困難とされる触覚について、個別具体的な小説表現を綿密に分析することによって、それらが再現される過程を跡づける。接触という行為を人と人との距離感ゼロ度と認定し、そこからのグラデーションによって心理的距離を計測することを試みている。また、現実世界において「触れる・撫でる」という行為（身体性）が稀薄になってきていることと、小説における表象との相関関係にも論及する。さらに、触覚と聴覚の融合としての「共感覚」にも論及し、小説描写の一義的な読みから両義性のある解釈へと論を進める。なお、不感症やフェティシズムといった、触覚の振れ幅がもたらす文学表現の豊穣さにも言及し、焼き物のような物質的触感や動物との触れあいにおける触覚を通して、逆に人間との間に起こる触覚表現の特徴を浮き彫りにする。

結論「感覚の記号学」は、実に曖昧な感覚である嗅覚を言語記号化することが小説創作の秘密と不可分であることを論じる。嗅覚のみならず、味覚や触覚といった、本論文で扱う接触型の感覚は、言葉にすることによってはじめて意味を有するとする。本結論の趣旨を「五感の虚構論」と結論づける所以である。

さて、以上の論考を踏まえて、著者は日本近代文学の研究について三つの観点を提唱する。まず一点目は、十九世紀から二十世紀にかけての近代百数十年の間に、ラジオやテレビといった、必ずしも接触を必要としない視覚・聴覚のみを重視するマスメディアの発展にしたがって、味覚・嗅覚・触覚が描かれた小説を解読することが徐々に難しくなってきているのではないかということである。つまり、それらの表現がそこに描かれているにもかかわらず、読み取ることが困難になってきたという仮説である。この説は読書行為に関する大規模な調査やその統計処理等によって検証可能なものと考えられる。次に、二点目は小説に描かれた味覚・嗅覚・触覚に関する表現を分析する以前に、現実世界において味覚・嗅覚・触覚を用いる機会を喪失してしまったのではないかという問題である。つまり、何かを理解する際に、目で見ることだけで満足してしまい、手に触れ、匂いをかぎ、時には口に入れて味わってみるという行為自体をおこなわなくなってしまったということである。この点は文学研究の範囲を逸脱するものではあるが、それらのことに論及する必要があるのは、読書体験を通して想像力を働かせることによって、二次的にそれらの感覚を発動させる行為は、実際に味わい、匂い、触れたという原体験に裏付けられたものだからである。最後に三点目として、近代小説の描写方法として、小説家がそれらの感覚を描くことを小説作法上の効果的な手段と考えていたという指摘である。この点については、膨大な分量の近代小説がデジタルデータとして蓄積されるようになった現状を鑑みれば、それらの表現における経年変化を知ることは必ずしも困難なことではないが、そこに小説家の意思を読み取ることは個々の作品を精読する以外に方法はないので、一朝一夕に結論を出せるものではないと思われる。

本論文は、本来、現実をアナロジーとしてしか表現できない小説について、言語表現を「五感」に分節化し、それらの用例を集積することによって、できうる限りデジタル的に解析しようとする試みと評することができる。そのために近代百年にわたる小説を調査・収集し、それらの多くについて、綿密にして繊細な分析を重ねていき、作家の独自性や時代の流行、あるいは小説ジャンルの特殊性などを考慮した上で、感覚表現の原石を掘り出すことによって構築された論考である。

以上のことから、学位申請者真銅正宏は、博士（文学）の学位を得る資格を有すると認める。